



『イギリス人』2011年
陶土、釉薬
187×115×80mm



『日本人』2011年
陶土、釉薬
170×99×92mm



『猫』制作年不詳
陶土、釉薬
81×45×45mm



『ドイツ人』2011年
陶土、釉薬
148×86×75mm



『アメリカ人』2011年
陶土、釉薬
173×107×79mm



(仮)『無題』制作年不詳 陶土 00×00×00mm



『無題』制作年不詳
陶土 76×72×14mm



『無題』制作年不詳
陶土 50×42×11mm



Masaaki Ooe
大江 正章
1938年～ /滋賀県在住

時に大声が飛び交う作業場内の一角。1人で机に向かって陶土を扱う大江さんの背中中は寡黙です。

1955年、施設に入所後、工場で働いたり製陶所で型押しや土の袋入れをしたりするなど、57歳になるまで地域に働きに出ていました。陶土で作品を作るようになったのは、1995年に職場を退職した後、入所施設にある作業場の1つ、陶器班に所属するようになってからです。彼が初めて作ったのは猫で、それは今

でも彼の作品を代表する題材です。

人型の作品を作るようになったのは、オランダ、ハワイ、グアムなどの外国に旅行に行ったことがきっかけです。街中には金髪や茶髪、そして肌の白い人たちがスーツを着てネクタイを締め早足で歩いていたり、つばの広い帽子を被った女性が子どもを連れていたりしたのでしょう。その情景が、外国人を見たこともなかった彼の脳裏に印象強く残ったことは容易に想像できます。

京都や東京のギャラリーから注文が来るたび、彼は本やテレビ、時にはリアルな動物や植物を見ては、部屋で何度もスケッチをし、そして陶土に向かい制作します。毎年の年賀状もすべて手描き。絵を描く、陶土で作るといった行為は、彼にとってなくてはならない日常なのです。

(井上 多枝子)



Komei Bekki
戸次 公明
1952年～ /滋賀県在住

他のメンバーが帰ってしまった夕方4時頃に、戸次さんは粘土室に入ってきます。そして週に4日、たっぷりの時間を土と遊び、楽しめます。その制作の手は、終了するまで止まることはありません。何かをブツブツつぶやきながら、一心に集中している姿には独特の緊張感が漂っています。

彼はまず、粘土の小さなカタマリを口の中に入れ、ガムのように粘土の感触を確かめ、それとは別の粘土を手に取り制作を始めま

す。この不思議なやり方はもう何十年も変わりません。

彼の扱うモチーフは、数年で切り替わり、様々なシリーズの作品があります。「お金」「食べ物」「人形」「動物」など、次々と形作ってゆきます。何かをブツブツつぶやきながら作る、というスタイルは、初めの頃からまったく変わりません。

また、制作途中での不思議な行動があります。着ている衣服を脱いで、裏返してたたみ、

またすぐ着るのです。スタッフは「どんな意味があるのか、本当のところはわかりません。でも、何かを切り替える時に欠かせない、彼の儀式のように思いますね」と話します。本当になぞの多い作家です。

彼のユニークな作品は、1991年信楽で開催された「世界陶芸祭」の記念切手に選ばれました。また1997年には、スイスのアール・ブリュット・コレクションで作品が展示され、その後收藏されています。(はた よしこ)